

夏期福音特別集会（4）（箱根湯本）

神の本願

――イザヤ書第46、47、48章――

1982年8月22日

小池辰雄

キリストの愛に担われて 「ラビ・ベン・エズラ」 お前も担う人になれ 十字架の義が即ち救
新たなる奥義 わが名のゆえに キリストの本願 本願の効力 祈り

【イザヤ46】

1 ベルは伏しネボは屈む^{かが}。かれらの像はけものと家畜^{けだもの}とのうえにあり。なんじらが抬^{もた}げあるきしものは荷となりて疲れおとろえたるけものの負うところとなりぬ。2 かれらは屈みかれらは共にふし、その荷となれる者をすくうこと能わずして己とらわれゆく。3 ヤコブの家よ、イスラエルのいへの遺れるものよ、腹をいでしより我におわれ胎をいでしより我にもたげられしものよ、皆われにきくべし。4 なんじらの年老るまで我はかわらず、白髪となるまで我なんじらを負わん。我つくりたれば抬^{もた}ぐべし。我また負いかつ救わん。5 なんじら我をたれに比べ、たれに配^{たぐ}い、たれに擬^{なず}え、かつ相くらぶべきか。6 人々ふくろより黄金^{こがね}をかたむけいだし、権衡^{はかり}をもて白銀^{しろがね}をはかり、金工^{かなたくみ}をやといてこれを神につくらせ、之にひれふして拜む。7 彼等はこれをもたげて肩にのせ、負いゆきてその処に安置す。すなわち立ちてその処をはなれず、人これにむかいて呼ばわれども答うること能わず、又これをすくいて苦難^{なやみ}のうちより出すことあたわず。

8 なんじら此事をおもいいでて堅くたつべし。悖逆者^{そむけるもの}よこのことを心にとめよ。9 汝等いにしえより以来^{このかた}のことをおもいいでよ。われは神なり我のほかに神なし。われは神なり我のごとき者なし。10 われは終りのことを始めよりつげ、いまだ成らざることを昔よりつげ、わが謀略^{はかりごと}はかならず立つといい、すべて我がよろこぶことを成さんといえり。11 われ東より鷺^{とろき}をまねき遠国よりわが定めおける人をまねかん。我このことを語りたれば必ず来らすべし。我このことを謀^{はか}りたればかならず成すべし。

12 なんじら心かたくなにして義にとおさかるものよ、我にきけ。13 われわが義をちかつかしむ可^べければその来^{きた}ること遠からず、わが救いおそからず。我すくいをシオンにあたえ、わが栄光をイスラエルにあたえん。



【イザヤ47】

1 バビロンの処女よ、くだりて塵のなかにすわれ。カルデヤ人のむすめよ、座^{みくら}にすわらずして地にすわれ。汝^{みくら}たたび婀娜^{ななやか}にして嬌^{あて}なりとなえらるることなからん。2 すりうすをとりて粉^{こな}をひけ、面^{かお}おおいをとりさり桂^{うぐいす}をぬぎ髓^{すね}をあらわして河^{かわ}をわたれ。3 なんじの肌はあらわれ、なんじの恥^{はにか}はみゆべし。われ仇^{あだ}をむくいて人をかえりみず。4 われらを贖^{あが}いたもう者はその名を万軍のエホバ、イスラエルの聖者という。5 カルデヤ人のむすめよ、なんじ口をつぐみてすわれ、又くらし所にいりておれ。汝^{みくら}たたびもろの国の主母^{とじ}となえらるることなからん。6 われわが民^{あわれみ}をいきどおりわが産業^{さんぎん}をけがして之^{これ}をなんじの手にあたえたり。汝^{みくら}これに憐憫^{あわれみ}をほどきず、年老^{とし}いたるものうえに甚^{はなは}だおもき軛^{くびき}をおきたり。7 汝^{みくら}いえらく我^{われ}とこしえに主母^{とじ}たらんと。斯^{かく}てこれらのことを心にとめず亦その終りをおもわざりき。

8 なんじ歡樂^{たのしみ}にふけり安らかにおり心のうちにただ我^{われ}のみにして我^{われ}の他に誰もなく我^{われ}はやもめとなりておらずまた子^こをうしなうことを知るまじとおもえる者よ、なんじ今^{いま}きけ。9 子^こをうしない寡婦^{やもめ}となるこの二つのこと一日のうちに俄^{にわか}になんじに來らん。汝^{みくら}おおく魔術^{まじない}をおこない、ひろく呪詛^{まじない}をほどこすといえどもみちみちて汝^{みくら}にきたるべし。10 汝^{みくら}おのれの惡^{わる}によりたのみていう、我^{われ}をみるものなしと。なんじの智慧^{かしこ}となんじの聰明^{さとし}とはなんじを惑^{まど}わせたり。なんじ心のうちにおもえらくただ我^{われ}のみにして我^{われ}のほかに誰もなしと。11 この故^ゆにわざわい汝^{みくら}にきたらん。なんじ呪^{まじ}いてこれを除^{はら}くことをしらず、艱難^{なやみ}なんじに落ちきたらん。汝^{みくら}これをはらうこと能^{あた}わず、なんじの思いよらざる荒廢^{あれたれ}にわか^{わか}に汝^{みくら}にきたるべし。

12 今^{いま}なんじわかきときより勤^{まじ}めおこないたる呪詛^{まじない}とおおくの魔術^{まじない}とをもて立ちむかうべし。あるいは益^{えき}をうることあらん。あるいは敵^{てき}をおそれしむることあらん。13 なんじは謀略^{はかりごと}をおおきによりて倦^うみつかれたり。かの天^{あま}をうらなうもの星^{ほし}をうらなうもの新月^{しんげつ}をうらなう者もし能^{あた}わば、いざたちて汝^{みくら}をきたらんとする事^{こと}よりまぬかれしむることをせよ。14 彼^{かれ}らは藁^{わら}のごとくなりて火^ひにやかれん。おのれの身^みをほのおの勢力^{いきおい}よりすくいいたすこと能^{あた}わず。その火^ひは身をあたたむべき炭火^{すす}にあらず。又その前にすわるべき火^ひにもあらず。15 汝^{みくら}がつとめて行^いいたる事は終^{つい}にかくのごとくならん。汝^{みくら}のわかきときより汝^{みくら}とうりかいしたる者^{もの}のおのその所にさすらいゆきて一人だになんじを救^{すく}うものなかるべし。

【イザヤ48】

1 ヤコブの家^いよなんじら之^{これ}をきけ、汝^{みくら}らはイスラエルの名^なをもて称^{なづ}えられ、



ユダの根源みなもとよりいで、エホバの名みなによりて誓い、イスラエルの神をかたりつぐれども、真実まことをもて義をもてせざるなり。²かれらはみずから聖京きよみやこのものとえイスラエルの神によりたのめり。その名は万軍のエホバという。³われ今よりさきに成りしことを既にいにしえより告げたり。われ口よりいだして既にのべつたえたり。我にわかにかの事をおこない而して成りぬ。⁴われ汝がかたくなにして項うなじの筋はくろがねその額はあかがねなるを知れり。⁵このゆえに我はやくよりかの事をなんじにつげ、その成らざるさきに之をなんじに聞かしめたり。恐らくはなんじ云わん、わが偶像これを成せり、刻みたるぞう鑄たる像これを命じたりと。⁶なんじ既にきけり、凡てこれを視よ、汝ら之をのべつたえざるか、われ今より新たなる事なんじが未だしらざりし秘事ひめごとをなんじに示さん。⁷これらの事はいま創造せられしにて上古いにしえよりありしにあらず。この日よりさきに汝これを聞かざりき。然らずば汝いわん、視よわれこれを知れりと。⁸汝これを聞くこともなく知ることなく、なんじの耳はいにしえより開けざりき。我なんじが欺きあざむきて生まれながら悖逆者そむくものとなえられしを知ればなり。⁹わが名のゆえによりて我いかりを遅くせん。わが頌美ほまれのゆえにより我しのびてなんじを絶滅たちほろぼすことをせじ。¹⁰視よわれなんじを煉ねりたり。されど白銀しろがねの如くせずして患難なやみの炉をもてこころみたり。¹¹われ己のため我おのれの為にこれを成さん。われ何いかでわが名をけがさしむべき。我わが栄光をほかの者にあたうることをせじ。

¹²ヤコブよわが召したるイスラエルよ、われにきけ。われは是なり。われは始また終なり。¹³わが手は地のもといを置すえ、わが右の手は天をのべたり。我よべば彼等はもろともに立つなり。¹⁴汝ら皆あつまりてきけ、エホバの愛するものエホバの好みたもう所をバビロンに成し、その臂かひなはカルデヤ人のうえにのぞまん。彼等のうち誰かこれらの事をのべつげしや。¹⁵ただ我のみ我かたれり。我かれをめし、我かれをきたらせたり。その道さかゆべし。¹⁶なんじら我にちかよりて之をきけ。我はじめより之をひそかにに語りしにあらず、その成りしときより我はかしこに在り。いま主エホバわれとその霊みたまをつかわしたまえり。

¹⁷なんじの贖主あがないぬし、イスラエルの聖者エホバかく言給いいたまわく、われはなんじの神エホバなり。我なんじに益することを教え、なんじを導きてそのゆくべき道にゆかしむ。¹⁸願くはなんじわが命令いましめにききしたがわんことを。もし然らばなんじの平安は河のごとく、汝の義はうみの波のごとく、¹⁹なんじの裔はすなのごとく、汝の体よりいづる者は細沙くわいのごとくなりて、その名はわがまえより絶たることなく亡ぼさることなからん。



20 なんじらバビロンより出でカルデヤ人よりのがれよ。なんじら歓びの声を
もてのべきかせ、地のはてにいたるまで語りつたえ、エホバはその僕ヤコ
ブをあがない給えりといえ。21 エホバかれらをして沙漠をゆかしめ給えりと
き彼等はかわきたることなかりき。エホバ彼等のために磐より水をながれし
め、また磐をさきたまえば水ほとばしりいであり。22 エホバいいたまわく、
悪しきものには平安あることなし。

●キリストの愛に担われて

キリストが一番愛読されたのは第二イザヤ書です。ですから、これは

「キリストの書」^{ふみ}

と言つてもいいわけなので、イザヤ書はある意味においては全聖書の縮図なんです。どうぞ、
若い人は魂をこめて第二イザヤ書を自分で、

「わがイザヤ書」

というものを詩の形で書かれるといい。それくらいのことをしなければダメです。

では、イザヤ書46章から入ります。

1 ベルは伏しネボは屈む。

「ベル」「ネボ」というのはもちろんバビロンの神さまの名前で、「ナルドック」という別
な名前を持っています。

かれらの像はけものと家畜^{けだもの}とのうえにあり。なんじらが抬^{もた}げあるきしものは
荷となりて疲れおとろえたるけものの負うところとなりぬ。2 かれらは屈み
かれらは共にふし、その荷となる者をすくうこと能わずして己とらわれぬ
く。

そういった偶像をもたげ歩いてる姿を言っているわけです。そんなものは彼らを本当は
救うこともない。しかし、イスラエルの神エホバは、もたげられているのではなくて、エ
ホバ自身がお前たちをもたげているんだと、完全に逆なんです。

3 ヤコブの家よ、イスラエルのいへの遺れるものよ、

「遺れるもの」というのは正に「選ばれたもの」と似たようなことです。信仰に入っても消
えていく人がたくさんある。そむく人もある。しかし、

「終りまで耐え忍ぶ者は救われるべし」

とキリストが言われましたが、「遺れる者」に、震われてもいつも残る者にならなければダ
メなんです。ふるわれて落ちてしまうのはダメです。神さまはどこまでも救おうとして追
求されますから、その信に対しては信をもって応える。愛に対しては愛をもって応える。
これが

「遺れる者」^{のこ}



になるわけです。

全托^{い、い}することが信ずることであり、全托することが愛することです。そうすれば自ずから残るわけです。なにも力まなくていい。神さまの本願の力は信であり愛である。本願^{い、い}力に投ずれば、必ず残る。人を見ていたらダメです。我々は本願の効力に裏付けられている。

腹をいでしより我におわれ胎をいでしより我にもたげられしものよ、皆われにきくべし。

「私が背負っているのだ。お前たちに背負われているような偶像の神ではないぞ」ということです。カナン^いの地にいた先住民の神や、そこから来たバアルの神は、みなかつがれている神です。だから、お神輿^{みこし}なんているものもちよつと考えものだね。

お神輿は神さまがかついでいるんだ。担^{にな}いは十字架ですから。我々の羔羊は私たちを担つてくださっている。十字架で担い、聖霊の力で担つてくださる。だから、ここところは非常にありがたい聖言です。我々は誰でも生まれてからずっと、信ずると信じないにかかわらず、神さまに、キリストの愛に担われてきたんだ。

⁴ なんじらの年老るまで我はかわらず、

「わが愛、わが信は――お前たちを信じ、お前たちを愛することは――変わらない」と。「そんなに信じてくださいましたか」と、参ってしまうわけです。

白髪となるまで我なんじらを負わん。

死にいたるまでと同じことです。

我つくりたれば抬^{もた}ぐべし。我また負いかつ救わん。

「負^{かつ}う」とか「担^{もた}ぐ」とか「抬^{もた}げる」とか、畳みかけて書いてある。切々とまた滾^{こん}々と波状的にこの音信を告げている。偶像の神とおよそ違うんだと。

●「ラビ・ベン・エズラ」

これは有名なブラウニングの「ラビ・ベン・エズラ」という詩の第一節です。

1. Grow old along with me!

The best is yet to be,

The last of life,

for which the first was made:

Our times are in His hand

Who saith A whole I planned,

Youth shows but half; trust God:

see all nor be afraid!

1 老い往けよわれと共にー

最善はこれからなり



人生の最後のためにこそ
最初は創造れし。

我らの時期々々は彼の聖手にあり。

彼は宣えり、

「全期をわれは目論めり、

青年の相は半に過ぎず、

神さまに信頼せよ、

一切を達観して懼るる勿れ。

ブラウニングらしい句です。

「最善はこれからだ」

という。ということは、なにも老年に限らない。我々は人生でいろいろな事にあっても、「最善はこれからだ」と言つて、いつも明日を望んで進んで行くことです。ブラウニングにとつては老年は正に黄金時代である。

また、著しい句を紹介しておきましょう。

10.

Maker, remake, complete, — I trust
what Thou shalt do!

10 創造者よ、造り直し完成し給え、

私はあなたが為し給ふことに委ねまはさる。

25. Thoughts hardly to be packed

Into a narrow act,

Fancies that broke through language
and escaped;

All I could never be,

All men ignored in me,

This, I was worth to God, whose wheel
the pitcher shaped.

25 狭苦しき行為の中に

包み込み得ざる思想

言葉をはみだし破つて逃げいく想像

私が望めど成り得ざりし一切

私の中にあるのに人々が無視したすべて
これぞ神に対する私の価値である。

神のろくろはこの壺を造ったのだ。

普通の判断と逆のことを言っている。

「私を造つてくださった神さまに対して、実はこのでき損ないの私が反って価値があった」と。

This, I was worth to God,

のあとに、私はこういう句を付け加えたい。

to receive God

「私は何もできなかった。また、皆にけなされた。

それは神さまを受けんがための私の価値であった。

私が無価値であることが神さまを受けんがためであった」

という気持です。ブラウニングは天界で「そうだ」と言ってくれるでしょう。

「このでき損ないは神さまを受けると、今度は神さまはそのでき損ないを造りかえる」

「そういうはずではなかった。お前をもつと凄いことにしてやるぞ」というわけです。だから、どんな運命環境に出会っても、どんなに失敗しても、それは最善が成るためである、神さまを受けるためである。そうやって、人生を大肯定して進んでいく。クリスチャンがめめそしたり、行き詰まってしよげたりしてはダメです。

「艱難に遭えばあうほど喜べ。これ御霊が汝らの上におおわんがためである」

とペテロも言っている。

●お前も担う人になれ

「白髪となるまで私は担い通すぞ。一生涯お前を担っていくぞ」

と。躓いても転んでも倒れても、神さまは担ってくださる。そのことは、

「お前も担う人になれ」

ということです。神に担われると、神の担いの力がくるから、今度は人を担うことになる。そこまではイザヤ書には書いてないけれども、その余韻が響いてきます。

「汝も我が力によつて人を担えよ」

と。イスラエルの民は神に担われた民であり、我々、キリストを受けた者は真のイスラエルである。これは人を担う。敵をも担う。

「敵を担って野戦病院へ連れていく姿」

これが「敵を愛する」ということです。これが本当の武士道精神です。

イザヤ書46章3〜5節ははつきり、ラインを引いておいてください。あなた方、聖書には自分でラインを引いて、

「自分の聖書でなければ他人の聖書を借りたって読めない。聖書は私の身体の延長である。火事になっても、何を忘れても聖書だけは抱いている」



というくらいにならないとね。

十字架というの——キリストに私たちは完全に担われた——今度は、

「汝ら¹¹を棄てて十字架を負え」

ということ。それでなければ、本当に十字架を受けとっていることにならない。その負う力は聖霊です。それが担い手です。ありがたいんです。神さまの国を来たらせる者は担う者なりということ。「聖国を来たらせたまえ」という祈りは担いの姿です。

8 なんじら此事をおもいいでて堅くたつべし。悖逆者よ^{このかた}このことを心にとめよ。^{そむけるもの}9 汝等いにしえより以来のことをおもいいでよ。われは神なり我のほかに神なし。われは神なり我のごとき者なし。

「われは神なり」

と畳みかけて言っている。この「神」は「エール」という字で、

「力あるもの」

という意味を持っている。「われは力あるものなり」ということです。愛の力、担いの力を持っている。

「我のほかに神なし」

とは、観念的に言っているのではない。みなこれは実力のことを言っている。

10 われは終のことを始よりつげ、いまだ成らざることを昔よりつげ、わが^{はかりごと}謀略はかならず立つといい、すべて我がよろこぶことを成さんといえり。

「我はアルファにしてオメガなり」

という。必ずアルファはオメガをもっている。オメガは必ずアルファを持っている。そういう関係ですから、必ず成るんです。創造者は完成なしたもう。どんなに人間がダメであっても、それを完成へ持つていく。ただ、終りまで信じなかったら、受けとらなかつたなら、これは仕方がない。これは自分で裁いてしまつて地獄へ行つてしまう。活ける神を信ずるか信じないかは自由だけれども、自由に自分は信じなかつたら、自分で自由に死を選んでいくということです。若い人がいくら理屈を言つて何を言つても結構です。何とでも仰つてください。その先は、結果は自分で分かるから。

議論する必要はない。それだけの権威をもつて友人に、

「宗教の世界は議論ではない、デイスカッションではないぞ」

とはつきり言えなければダメです。デイスカッションで結論が出たものが何になるか。ヨーロッパ人はデイスカッションが好きだね、聖書研究会とか、話したあとで質疑応答だとか。私はそんなのはごめんだ。私はただ告白しているので、質疑応答なんかいらん。

●十字架の義が即ち救

11 われ東より鷺をまねき遠国^{とおきくに}よりわが定めおける人をまねかん。



これはイスラエルを帰還させるクロス王のことを言っている。

我このことを語りたれば必ず来らすべし。我このことを謀^{はか}りたればかならず成すべし。

¹² なんじら心かたくなにして義にとおざかるものよ、我にきけ。¹³ われわが義をちかづかしむ可^べければその来^{きた}ること遠からず、わが救いおそからず。我すくい^をシオンにあたえ、わが栄光をイスラエルにあたえん。

「義」と「救い」がここにも出ている。これは同義語です。義が即ち救いであり、救いは即ち義にあつてということです。

「神の義は福音にあらわれる」

とパウロが言った。これにルターは躓いて苦しんだ。

「愛が福音に現れる」

なら分かるけれども、

「義が福音に現れる」

とは何ごとかと彼は思った。そして、彼は特に詩篇の第二番目の研究で

「義が救う」

ということに気がついた。1517年頃です。ルターが気がついたのは詩篇31篇です。

「エホバよわれ汝によりたのむ。願くはいずれの日までも愧^{はじ}をおわしめたもうなかれ。なんじの義をもてわれを助けたまえ。」(詩篇31・1)

「なんじの義をもてわれを助けたまえ」

という言葉に躓いた。

「愛で助けるなら分かるけれども、義で助けるとはどういうことか」

と。義は審くから。彼は初めは「審きの義」しかわからなかった。義にはもちろん審きがあります。隠れたる神は義において愛を隠している。ということは「義を与える」んです。十字架は私たちに贖いをもつて義を与える。だから、十字架を受けとることによって、

「信仰によって義とされる」

ということがそのことです。「義とされる」というよりかむしろ

「義を与えられる」

と言った方がいい。もちろん律法的な言葉としては「義とされる」ですけれども。だから、

「わが義をもて救う」

ということですよ。その義は必ず審判をもっています。イスラエルの民は半世紀の捕囚でもって審かれました。それに服しました。そうすると、必ず救いがくる。義が立つところには、その目的は救いにある。イスラエルはそのような審判を受けた。

ある選ばれた者がまた審判を受ける。選ばれた者は今度は担う。そして、ある一人の人が今度は担ってしまう。そういうことになる。



「義即救」

ということ。その「即」という字に十字架があるわけです。この十字架はイザヤ書53章になる。これはおごそかな義です。しかしながら、それは本当に深い愛なんです。深い愛が隠れている。これが隠れたる神の内容です。ところが、愛は、神さまの愛は、逆にまた審判なんです。キリストの愛を受け損なうて拒めば、それは審判に向かう。愛の陰に審きが隠れている。ただ

「よし、よし」

なんていうのではない。これもおごそかな愛です。身を棄てたキリストの愛を受けとらないと、自分で審きを招く。愛の陰に審きがある恐ろしい愛です。

「愛を受けとるに値しませんから」

なんて言うて退くのではない。どのような人でも愛を受けるに値しないものはない。十字架上の片一方の盗賊もキリストの愛を受けた。

「せめても私を覚えてください。私はさんざん悪いことをしました」

と碎けた。そうしたら、キリストは

「汝、我と共にパラダイスにあり。」

お前は今日、私と一緒にパラダイスだ」

と仰った。無条件の愛です。無条件の愛を条件付けて受けとらなかつたら、神さまは審きたくないのに、自分で審きを招いてしまう。十字架の愛というのはそういう愛です。

47章は不信の事態がみな滅びに向かつている姿を言っている。

4 われらを贖いたもう者はその名を万軍のエホバ、イスラエルの聖者という。

もうおよそ世界が違うんだと、ここに不思議に一句だけ出ている。

10 汝おのれの悪によりたのみていう、我をみるものなしと。なんじの智慧となんじの聡明とはなんじを惑わせたり。なんじ心のうちにおもえらくただ我のみにして我のほかには誰もなしと。

この世の知恵はダメだと。

14 彼らは藁のごとくなりて火にやかれん。おのれの身をほのおの勢力よりすくいだすこと能わず。その火は身をあたたまむべき炭火にあらず。又その前にすわるべき火にもあらず。15 汝がつとめて行いたる事は終にかくのごとくならん。汝のわかきときより汝とうりかいしたる者のおのその所にさすらいゆきて一人だになんじを救うものなかるべし。

バビロンの姿だね、これはちよつと今の日本みたいだな。47章は要するにバビロンの惨憺たる、実存ならざる姿、それはみな滅びに向かつていくということを言っている。



● 新たなる奥義

イザヤ48章に入ります。

「ヤコブの家よなんじら之をきけ、汝らはイスラエルの名をもて称えられ、ユダの根源^{みなもと}よりいで、エホバの名^{みな}によりて誓い、イスラエルの神をかたりつぐれども、真実^{まこと}をもて義をもてせざるなり。

「義」は「正義」とは訳さない。「真理」(エメツ)と「義」(セデック)によつていないということです。

2 かれらはみずから聖^{きよきみやこ}京のものとなえイスラエルの神によりたのめり。その名は万軍のエホバという。3 われ今よりさきに成りしことを既にいにしえより告げたり。われ口よりいだして既にのべつたえたり。我にわか^{わか}にこの事をおこない而して成りぬ。4 われ汝がかたくなにして項^{うなじ}の筋はくろがねその額はあかがねなるを知れり。

これは随分凄い文句だな。非常に具体的な表現をする。ユダヤ人は頑固な民なんだ。パウロなんかも初めはそれ式なんだ。それをキリストに霊撃^{れいきげ}されてひっくり返された。

5 このゆえに我はやくよりかの事をなんじにつげ、その成らざるさきに之をなんじに聞かしめたり。恐らくはなんじ云わん、わが偶像これを成せり、刻みたるぞう鑄たる像これを命じたりと。

「何を言っているか、寝言を言うな」と神さまが言っているわけです。

6 なんじ既にきけり、凡てこれを視よ、汝ら之をのべつたえざるか、われ今より新たなる事なんじが未だしらざりし秘事^{ひみつこと}をなんじに示さん。

これはちよつと注目を要する。新たなる事、神秘なること、神秘的な新しいこと。奥義ということ、隠されたことです。

7 これらの事はいま創造せられしにて上古^{いにしえ}よりありしにあらず。この日よりさきに汝これを聞かざりき。然らずば汝いわん、視よわれこれを知れりと。8 汝これを聞くこともなく知ることなく、なんじの耳はいにしえより開けざりき。我なんじが欺きあざむきて生まれながら悖逆^{そむくもの}者となえられしを知ればなり。

誰も知らんだろうと。「秘事^{ひみつこと}」とは、本当に新らしいこと。そして、第二イザヤの最高峰の所に、最深の所に段々向かつていく、その預めの言葉です。

● わが名のゆえに

9 わが名のゆえによりて我いかりを遅くせん。わが頌美^{ほまれ}のゆえにより我し^しのびてなんじを絶滅^{たちほろぼ}すことをせじ。10 視よわれなんじを煉^ねりたり。されど白銀^{しろがね}の如くせずして患難^{なやみ}の炉をもてこころみたり。



9、10 節は非常に強いところです。これは注目してください。

「わが名のゆえに、わが^{ほまれ}頌美のゆえに滅ぼすことをしない。怒りも遅くする。白銀の如くせずして患難の炉をもてこころみた」

と。ユダもイスラエルもみな不信の民で、本当に国が滅亡するような艱難に遭いましたから。もちろん、預言者は不信者ではない。また、知られざる本当の、預言者と同じような魂の人もいたでしょう。けれども、大体がダメだから、ひっくり返された。しかし、

「国が滅びることまでもして、そういうような艱難にも遭わせたけれども、名のゆえに私は究極においてはお前たちを救って、その救を全世界にもつていく」

という突き抜けたものをイザヤはいただいているわけです。

「われ己のため我おのれの為にこれを成さん。われ何^{いか}でわが名をけがさしむべき。我わが栄光をほかの者にあたうることをせじ。

神さまは「自分のためだ」という。

「我々人間は、エゴイズムはいかん。神さまだけはエゴイズムがいいのか」

と、そういうようにヘタすると、平面論理では考えるかもしれない。「己のため」と言ったらつしやるが、神さまのエゴというものは一体何ですか。

「まあ、神さまだから仕方がない」

なんて、そうではない。ここに

「私の他に神はない」

としきりに言っている。神さまは「我」と仰っているけれども、神さまはどういう神か。「新たなること、秘事」というのがこのことではないと思いますけれども。我々の方から「神さまのため」というのは分かるけれども、神さまの方から

「わが為、わが栄光のため、わが名のゆえに」

と言っている。

これはやはり、このエゴは「無我の我」です。逆説的なんです。神さまが「我」と仰るときのこの「我」は、神さま自身がもう「我無き我」なんです。客観的には

「ニツヒツ・ザイン」「無存在」

のような無我の我です。神は、最後には私は、

「無」

と言うよりか表現の仕方がない。これは愛も義も全部含んでしまうような無限定、無量の世界です。無限定とか無量とかいう言葉すらも要らない。無に極まってしまう。即ち、「わがため」というのは、

「私はお前たちを救わざるを得ない。宇宙は完成せざるを得ない。そういう我なんだ。自分はただ威張っているような神ではない。どん底に立つ我だ。そういう我のためなんだ。その他に神はない」



ということ、この「我」は逆説的な表現なんです。そこは間違えないようにしてください。一切を救わざるべからずという、一切に本当に義を与えないではいけないという、それが「本願の我」、神の本願です。本願をもった神さまが本願の我です。

「本願の我のためにあるんだ」
ということ、です。

●キリストの本願

そこは浄土真宗の法然、親鸞の信仰がその救いにきている。法然が書いた『一枚起請文』に、「もろこし我朝にもろもろの智者たちのさたし申さるる観念の念にもあらず。また学問をして念の心をさとりて申す念仏にもあらず。唯往生ごくらくのためには南無阿弥陀仏と申してうたがひなく往生するぞとおもひとりて申す外には別のしさい候はず。ただし三心四修と申す事の候はみな決定して南無阿弥陀仏にて往生するぞとおもふうちにこもり候なり。このほかにおくふかきことを存せば二尊のあはれみにはづれ本願にもれ候べし。念仏を信ぜん人はたとひ一代の法をよくよく学すとも一文不知の愚鈍の身になして尼入道の無智のともがらに同うして、智者のふるまひをせずしてただ一向に念仏すべし。」

とある。南無阿弥陀仏というのは疑いもなく往生する。

「南無阿弥陀仏が南無阿弥陀仏をする」

という言い方がしてある。南無阿弥陀仏と祈れるのは、本願の声がそこにかかってきているからだということです。弥陀の本願は本当に己を棄て衆生を救うという角度がある。

「我こそはエホバなり。他に神なし。我は義をもて救う」

というのは――イスラエルの宗教は福音に完成されますけれども――その角度をもった凄
い言葉です。

木喰の歌に、
もくじき

「木喰のけさや衣は破れてもまだ本願は破れざりけり」

「仏法はよきもあしきもへだてなしわが本願にもらすものなし」

とある。相対的な善悪というへだてはない。わが本願にもらすものがないという。

神さまの本願から、キリストの本願からはずれるものは一つもない。受ければ無条件に受けとられる。十字架上の片一方の盗賊は無条件にキリストを受けました。もう片一方は

「お前は神の子なら救つたらいいではないか」

と傲慢でした。これは滅びます。これが人類を二分するところのものです。

ですから、

「わが名のゆえにおいて、わが誉れの故において」

ということ。



11 われ己のため我おのれの為にこれを成さん。われ何でわが名をけがさしむべき。我わが栄光をほかの者にあたうることをせじ。

という。全部、そういう角度から私たちは受けとると、もう神さまに圧倒されます。

12 ヤコブよわが召したるイスラエルよ、われにきけ。われは是なり。われは始めまた終りなり。

原因であり目的である、創造であり完成である。人生はこの終末的な完成、終末的な神の国、それに対する大希望をもたなかったら、つまらんですよ。

「空の空なるかな、すべて空なり」

と、伝道の書が言うとおりです。私たちの胸三寸の中にあるものは、もう熾んなるものです。これは原子爆弾よりかもつと凄いものだ。もつと凄い霊的な元始力がある。いつでも爆発するような。皆さんはそういう一人ひとりですよ。その勢いでこの一年をやってください。

●本願の効力

15 ただ我のみ我かたれり。我かれをめし、我かれをきたらせたり。その道さかゆべし。

イザヤ書は実に驚くべき書だ。

「エノキー、エノキー」(我、我)

という言葉が繰り返して使っている。日本語では「我、我」というと「我々」になってしまいうので困るものだから、「ただ我のみ」と訳すが、それはそれでいいけれども。

16 なんじら我にちかよりて之をきけ。我はじめより之をひそかにに語りしにあらず、その成りしときより我はかしこに在り。いま主エホバわれとその霊とをつかわしたまえり。

ここに特に

「霊をつかわしたまえり」

という不思議な言い方をしている。もちろん、この「われ」は第二イザヤ自身です。第二イザヤはやはり本当にエホバの僕的な預言者であったことは間違いない。名が伝わっていないというところがおもしろい。全く隠り身なんだ。第二イザヤは神さまの中に隠れている身なんだ。神さまの中に隠れていて、居ない。

17 なんじの贖主、イスラエルの聖者エホバかく言給く、

聖者は贖主である。

われはなんじの神エホバなり。

実存主であると。

我なんじに益することを教え、なんじを導きてそのゆくべき道にゆかしむ。
18 願くはなんじわが命令にききしたがわんことを。もし然らばなんじの平安



は河のごとく、汝の義はうみの波のごとく、

と、不思議な言葉が書いてある。ここに

「なんじの平安」

と書いてある。ユダヤ人が「こんにちわ」とか「さようなら」とか挨拶するとき

「シャーローム」

と言う。これは「平和」ではない。「平安」です。神さまとの関係が義であり救いであるようにということ。平安の内容は

「神の義、神の救いが汝にあるように」

ということ。それであれば、人間の間の平和は絶対にきません。平和運動よりも平安運動の方が大事なんだ。

「私の言葉に従うと、しからば汝の平安は河の如く、汝の義は海の波のごとく」

と、平安が本当に河のごとく流れていく。義は海の波のごとく力強く滔々として動いていく、というわけだ。

¹⁹ なんじの裔はすなのごとく、汝の体よりいづる者は細沙のごとくなりて、

その名はわがまえより絶たることなく¹ばさることなからん。

そういうように、熾んに神の栄光がお前たちをとおして現れるぞと。

²⁰ なんじらバビロンより出でカルデヤ人よりのがれよ。なんじら歓びの声

をもてのべきかせ、地のはてにいたるまで語りつたえ、エホバはその僕ヤコ

ブをあがない給えりといえ。

「エホバはその僕ヤコブをあがない給えり」

とある。「エホバはその僕イスラエル（ヤコブ）をあがない給えり」とは決定的な言葉です。

その贖いの消息をやがてイザヤ書53章でもって言うわけです。羔羊に極まる。羔羊の担いということ。す。

「私はお前たちを担ってきた。生まれてから死にいたるまでお前たちを担って

いるんだ」

と。イザヤ書46章のところ。本願の担いです。神の本願の効力が私たちを救いへと担っている。

「己が十字架を負いて我に従え」

とキリストが言われた。それゆえに、我々もまた己を棄てて、担う。そしていつか曠野に倒れる。そこに本当に神の国を開かせる、天界の神の国を来たらせる一番大事な姿がある。私たちは本願の力で人を担っていく。本願の力で人を担う、そういう羔羊のキリストです。

私たちはもちろん、このイザヤ書を——語るも聞くも同じこと——このイザヤの言葉の背後から迫ってくるところの神さまの御霊、キリストの霊、キリストの言葉に、愛に、力に、生命に圧倒されながら、この集会を終えさせられたことを感謝いたします。



● 祈り

祈ります。私たちの思いをはるかに越え、私たちの道をはるかに絶するところの道を第二イザヤを通して示してください、

「汝ら一人ひとりにそれぞれの路を歩ませる。それは天の大道に通ずる」

と仰ってください、ありがとうございます。私たち一人ひとは掛け替えのない存在としてあなたから顧みられ、生まれてから死にいたるまで、あなたの聖国にいたるまで、この道を歩ませられながら、これが本当に大きなハーモニーとなつて一つとされる、この驚くべき福音の姿を今新しく私たちに受けとらしめて、ありがとうございます。

この召団は垣根のない召団です。

「汝らの幕屋をいよいよ拡げよ」

とイザヤ書にもありますが、このようにしてあなたが拡げてくださいますから、ありがとうございます。福音を要するところの人たちがまだたくさんいます。どうぞ、この福音を要する人たちに、次の一年間会わせてください。そして、

「その隣人に対して本当にこの福音を身をもって伝えることが我々の実存である」ということを徹底的に行っていくことができますように願いたてまつります。

私たちは福音のためには恥を負います。人に叱られても何でも、この福音を宣べざるを得ません、伝えざるを得ません。キリストが十字架を負われたように、私たちは十字架を負うところに本当に栄光があることをいよいよ知らしめられ、これをもって私たちは勇んで進んでいきます。

ここにあるところの若い小さな人たちがみな同じく、それぞれ使命を担っていますが、そのことにいよいよ気がつきまして、そして、私たちのまた来たるべき大集会はまた進んだ姿をもって現れることを信じ感謝いたします。

一切はあなたの御名のゆえ、あなたの故であり、またあなたは本当にアルファにしてオメガなるかたです。私たちはその創造と完成に向かって、このあなたの歴史の中を、あなたの栄光にいたるまで、

「汝らは世の光なり」

と、そのようにしてあなたの光の中に入つて私たちを光らしめてくださるように願いたてまつります。一切はあなたの栄光、御名をたたえ、ハレルヤ、感謝いたします。今、兄弟姉妹たちの全身に溢れるところのそれぞれの感謝と讃美と祈りとともに、主キリストの御名によりて捧げたてまつる。アーメン。

